

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	五家の荘に入る記：雑録
Author(s)	村雨
Citation	龍南會雜誌， 9 3： 5 6 - 6 4
Issue date	1902-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5369">http://hdl.handle.net/2298/5369</a>
Right	

。麗らかなる日に晒すなり。麗らかなる日にや晒さん。

夫れ天地開闢の昔より。山海草木に至るまで。万物悉く成佛して。皆靈驗の神所たり。とりわけ四季を司る事。先づ春の神といつば。此山姫の神徳として。草木森羅萬象まで。御影の綠充ち満てり。然れば所の名にし負ふ。佐保の山家の恵み深く。千秋萬徳の春を得て。佐保山姫と顯はれ給ふ……

謠曲佐保山は、支那神仙説の分子を含むこと多く、佐保山姫を以て、羽衣天女の説話に見ゆる、天津少女ツカトメと同一視して、曲中に、月夜の歌舞音樂の事を、記するに至れり。思ふに、謠曲の最大缺點は、此の如き、内面の不調和の點に、存するが如し。但し、此等の支那神仙説的分子を除去すれば、其他は、純粹の國民神話にして、日の子佐保姫の性質、甚だ明かに、其中に見へたり。曲に見へたる佐保山姫は、春の神にして、草木森羅萬象の生育を司る、其山に晒せる白妙の衣、其身に纏へる薄き衣は、即ち、春の霞の標象にして、此點より見るも、佐保山姫は、此霞の神格化なり。春霞の人格化は、亦た、古事記明宮アタノミヤの段に見ゆる、兄弟二神の妻争ひの説話にも、これあり。但し、此説話は、春秋二季の争鬭を、その詩的修飾として、實は、一個の社會的説話を、物語るものなり、

## 五家の莊に入る記

(一)

村

雨

昨日の夕暮より、泣くが如く曇りし大空、今にも降り出でむとして降らず、氣つかひつゝも尚一

縷の望みを偶して臥床に入りつ。夢はいつしか、五家の山中に迷ひ入りて、我はしばし岩角崎嶇たる谷の岨路をわゆみしが、ふと目を開けば、窓の外白み渡れり。寢忘れたりけりなごねどるきてはね起きつ、窓紗はねのけて、仰げばゆふべの雲、いづくにか吹き拂はれけむ、春とはいへ碧落高く深くて、一痕の片破月斜めに半天にかかり、青光やはらかに落ち來れば、窓前の松樹の梢、瑩々と白露のきらめくは、夜半に霖雨の降れるにやあらむ、時計を見るに未だ三時半、早ければ、再び夜其の中にもぐり込みぬ。

目睡む程もなく明けぬ。携ふるものとは、外套一枚の外、手帳と、小刀と、古手拭とのみ、書生の身はよろづに心安く、尻破れたる洋服に、脚絆あてゝ、帽子被りて立ちあがれば、そのまゝ出來あがりたる旅装、それでは行つてまゐりますと同室の豫山子にいへば、夜具の中より首さし出して、眠たさそうなる目のあたりこすりながら、では早く御歸りといふ聲を聞き捨てに、吉國、林、片山の三氏をうながして、寄宿舎を出づ。曉風征衣を吹きて、清爽の氣吟腔に溢る。遙かに小手を翳して行く手を望めば、連山の青黛新たに洗はれて、秀色鮮やかに、眉睫の間に落ち來る。氣ますおどる。

白川を渡り出水を過る。校を出づる頃より、黒雲一朵、阿蘇の一角より湧き出でしが、見る／＼蒼昊に瀰漫して、しはしが程寸碧を見ざるに至れり。されど、俄かに降り出でんするけはいもあらず。行く／＼田原の開けたる中を過ぐ。春風一度難波の葦を吹き渡りてより、遠村近郭、漸く駘蕩の様を帯び來りて、若草地に崩れ、枝葉ゆたかに孕み、麥の青さよりかけりて、高く天上より嫦娥宮の樂を落す雲雀、菜の花の黄なるより舞ひ出て行人の袂にむつるゝ胡蝶、何れか春の化身にあら

此邊、途中、三々伍々隊をなして行く小學校の生徒にあふ事多し。新調の衣に袴不格好に着なし、例に似ず、道草も取らでいさぎ勝なるも、開校の日なればこそ。やがて行く事數町、國旗十文字に組み合せたる門柱に、某尋常小學校と讀まれたり。新らしくめぐる垣の隅につどいて、よろす扣へ目に、指くはへたる、けふはしめて入校せる新參者ならんか。ひきかへて、運動場の只中に、例にもまして活潑にかけめぐる腕白五六人、これはこの社會の先輩なり。

黃榮綠麥錯綜して三春の錦を織りなせる疇郊の間を過り、小丘一つ越ゆれば、再び田野なり。川に沿うて上れば、三船に着す。小店に憩ひて晝飯喫ふ。嫩筍新たに膳に上りて、風味、味ふにたり。濱町原町と聞き違へられて、あらぬ方に赴かむとせしこそ、こよなき失策なりけれ。橋詰にて引きかへし、小學校の垣の外をめぐる、煙の隴を辿りて、原町への新道に出づるを得たり。つま先稍仰きて、僅かなる山路、道行く人にあふ事なければ、聲高らかに吟じつゝ、春風一路、とろとろ坂、走り下れば、眼界またも開けて、一川南より走り來りて溶々平蕪の末に流れ去る。綠川の支流糸田川とはこれ。

淺水斷橋、人罕なる所、疎柳綠烟を吐き、竹離茅屋、犬鶏相應ふる所、酒旗高く翻り、北邑南郊、鳥啼き、花笑ひ、氣うらゝかにして、香風行人の袂に寒からず、春信至り至らぬ隈もなし。

東雲野といふ所に至る程、醉人の扶けられつゝ、泳ぎ行くがあり、いきなり、片手に片山氏を捕へて放たず、目を刮り、口のあたり蠢かせつゝ、何とか云はんぞとすれど言葉通はざり、充分いゝ氣嫌だなあといへば、伴なる男、ヘイ、今日は入校式でございまして、學校で飲みましてこの通り

でございます。すこやかなる罪なさうなる筈なりき。

地勢蹙りて、路は稍上りとなれり。崑石瑰磊たる土を、碧流一道、寒玉を連ねて駢駛する様を左手にながめたりしが、それもいつしか見失なはれて、隴圃の中を辿る事半里、松橋術道と合す。兩道相對して峙てる間を、一橋宙に架して欹斜飛ばむとす。欄によりて下瞰すれば、十仞の下、谿水襲々、岩角に咽むで流れ去る。やがて今日の宿泊地なる原町に着す。山中の一破邑、旅宿は只二軒あるのみといふ。

日一日、曇りつくせる大空、今に晴れやらす。欄に凭れて眺めやれば、暮雲低く山頂に垂れて、乾坤今やかなしげに暮れなんとす。山寺の鐘聲幾杵、殷々谿谷に鳴動して、誰が家の花をや誘ひけむ、見る／＼眉を壓して頹れ落つる山嵐、雨を帯びて冷やかなり。折しも傍に來れる亭主を呼びて、ごうだらう、明日の天氣は。といふに、さうでござりますな、西の方の空が晴れてさへ居れば、大丈夫でござりますが、……と首傾けたり。

廳、小女膳を運び來れり。食を畢へて、下駄突きかけしまゝ、近郊を徜徉す。夜色まさに十方を封せむとして、人顔また辨すべからざるに至り、宿に歸りて亭主を呼び、五家への道筋、迷ひ路なを精しく尋ね、手帳にしるしなとする程に、時も過ぎぬ。明日の疲れもあるべければとて、寢につきぬ。

(二)

あくる朝、早く吾も人も叩き起されぬ。障子を押開けば、前山模糊として、未だ眠りより醒めやらず、糸の如き春雨霏々と降りて音もせず、唯が家の子ど、前髪の少女十三、傾ゐたる蛇の傘の上

に、白葩二三片こぼれたるも哀れに、露を含める軒頭の柳の枝に、ち、と鳴く小鳥の音も何となくしめやかなり。外套は持ちぬれど、山路の困難なる恐れあれば、わざと着けず。草鞋四足ど、握り飯二個を腰に括りつけ、菅の小笠を傾けつ、握り太なる竹の四尺ばかりなるを策つきたる、宛然洋服の巡禮姿、目をまるくして見とれたる路傍の人にも、吾れにも可笑かりけり。川に沿ふて溯り行く。浮草漂ふ春小田の水口に、腸ふくらして鳴く河鹿の聲、處からに哀れなり。細徑谷間に入りて、吾れ漸く人間を遠ざからむす。四顧すれば、右手の山の扁に、轟々天を刺せる杉の梢より、屹立せる岩の角より、せくらぐ小川の水より、はたや、吾が吐く息の末より、大霧濛々と立ち上りて、林をめぐり、丘覆ひ、野を壓し、路を埋めて、咫尺の地もさだかならず。

早桶の里を過ぎてまた人家を見ず。一線の岨路絶えなむとして白霧の中に迷ひ入けり。我笠の上にかゝる雨の幽なるひびきを聞き、露を含める道芝の上に杖つきたてゝおほつかなくも霧深き山中に迷ひ入らむとす。仰けば山は人面を摩して敬ち、一路其腰をうねり上る。これより句配忽ち急、前に行くものゝ草鞋、後に辿るものゝ管笠に觸ひばかりの坂、剩へ夜來の雨に濺がれて、滑らかなること限りなく、わずかに木の根を捕へ、草を引きて互に相いましめつゝ辿り上る。少しく平らかなる所に杖を立てて下瞰すれば、今過ぎこし村家、微茫の中僅かに指すを得べく、岩走る河川の水の、千反の白布をひきて、樹木の間に見えかくれる様、たとへば簾を隔てゝ美人を睹るか如く。

再び杖を取り直し、たゆむ心をいさめつゝ、上り上ること幾何なりけむ、谷底今は全く見えずなりて、十方只漠々、渾沌たる宇宙、こゝに四個の臭骸の蠢動せるあるのみ。あやしき哉、暗澹たる空冥の中、忽焉として、物あり。浮べり。緑の髪長く垂れ、水色の綾を重ねたり、吾等を距る咫尺

の間、雲に乗り、風に御し、飄として天外に去らむとす。晦暗の時に乗して、素娥戯れに羽衣の姿を現るあるなからむや。谿風一陣、蓬然として雲氣を捲きて掩ひ上すれば、忽ちにしてまた見るべからず。蓋轡峰の烟雨の中に出没するなり。

辛うじて上りつめの所に達す。林氏は帽子を落したりとて再び今の坂を走り下る。吾等は三人青草の上に手拭うち籍さて休ひつゝ林氏を俟つ。登高已に幾千百尺、雲雨潮の如く麓をめぐらして、濛々たり、混々たり。紫巾をかつぎて走りて且つ僵れんとするものは、高楠、朝見の諸山にして、邇く霧海の中より髻を擡げて起たんとするは薊山か。天颺時に遽然として風し來れば、雲絲縷々として空山に湧き、たごへば魅魍の陸梁するが如く、小羊の群走するが如く、寂として聲なく、虚を馮りて過ぎしが、倏忽にして其逝く所を知らず。

暫して林氏歸り來りし故立ちあがる。鳥の通ふ程なる小徑翠をめぐる。あるときは苔むす巖を踏み、あるときは落葉に埋れし流れに草鞋を浸す。かくて半里も辿りけむ、山嵐暗き杉林の中に入りぬ。道また仰ぐ。木の根、岩が根ふみしたきつゝ、やをら上り行く程に、赤毛布を被りながら下り來る男にあひぬ。峠はまだ程遠きやと尋ぬるに、凡そ半里もあるべしといひつゝ、やがて身を翻すよと見るまに、姿は早や林の中に見へずなりぬ。

搔頭林をぬけて泥滑らかなる坂路を上り畢れば峠なり。白屋二軒ばかりあり。戸口に遊べる五六歳の童、余等を見るより早くかけ込みぬ。

## (三)

天一たび晴れむとせしが、やがて急雨銀箭の如く空中に亂飛し、落ちては白玉となりて、丈にあ

まれる熊笹の葉の上にまろび、嘈々として聲あり。暫にして雨脚我に遠ざかりて、白山岳を抹し去りぬ。此あたりの山腹處々焼き拂はれ、枯木、哨然として路を擁して立てり。後に聞けば、其跡は、蜀黍、稗、麥などを作らむためなりとぞ。さりとは呑氣なることかな。

これより路は下りにして、傾斜またただやかなり。時を下りて程遠からざる所にて、一老夫の赤牛を叱しつゝ上り来るにあふ。牛の脊にはあらけづりの下駄をしたゝかに負はせ、已れも枋橈はめて擔ぎたり。後に聞けば、此下駄を原町まで運び行きて、一足二錢五厘ばかりにて賣り、味噌、醬油、鹽、及び僅かばかりの米を購ひ得て歸るといふ。今日こゝて來しかの險しき山路を、かはかりの荷を負ひ、牛を牽きてこゝゆかんとは、海邊に人となりし身には、ひたすらにたゞろかれぬ。これより葉末までの間、三八五人群をなして、同玄く下駄を擔ひ、牛の鼻索を把りて行くにあひぬ。中には、婦女、兒童なども見られぬ。

さき程より倦怠の色ありし吉國氏、飯食はうと弱音を吐き出したり。實はわれも先程より斜めならせ空腹にねばれたれば、早速賛成といはんとするを頑固一徹の片山氏、なに、今一時俟て、今に家があるだらうといふに林氏も賛成の様子、吾れはそのまゝ口を噤みて止みぬ。されど一步步々腹には力なくなり、目も眩み、足も定まらざる程なるを、瘦我慢の用ゐる所はこゝなりと、殆んど無宙になりて足を運ぶ程に、片山氏はかへり見て吉川君はつかれはせぬかといふ。いや、さ程の事もないと何氣なく答ふるに、嘘いふな、君の顔色の眞青になつたのは何だと、星をさくられてぐうの音も出でず。

漸く一の家を見出で、矢も楯もたずらず、つと這入りこめば、中では夫婦と見ゆるふたりの老人



ど。子を抱ける若婦と爐の傍に坐せり。しばし中食をさしてたまはれといへば、山家の人のすなはなる心安くうけひきて、老夫婦は坐を退き、女は兒を爐に渡して、かひ／＼しく薪さしくべ、湯沸しなぞす。家は一つの室よりなり、十疊計りもあるへし、汚れたるむしろをしきつめたり。吾等四人は圍爐裡をめぐりて足さしくへ、簞包みを取り出して食ふ。誠に空腹は最良の料理人なりといひけん、此味とても書籍堆裡に埋るゝ人には語るを得じ。

漸く心も落ちつきしかば、厚く禮を述べて出立す。山陰の道をあゆむ事二里、山家三四軒山腹に梁して立てるあり。葉木村の入口なり。これより葉木の本村まで半里に充たず。此村は世々緒方氏の住める所にして、先祖は緒方四郎平盛辛と云ふ。折角こゝまで來ればとて一寸立ちよるに、今朝吾等より一時間ばかり前に原町を出でし二人は、この家に宿り居れり。吾等は明日五木の銅山まで行くべき豫定なれば、はや四時を過ぎぬれど今宵は仁田尾に宿る事と定め、くはしき道を尋ねて出立す。

路は涼々たる谿水の中に絶へぬ。水面に脊を現はせる小石を拾ひ飛べは、一路絶へなんとしてわつかに山の半腹にかよへり。一筋僅かに勞れはてたる身を支へて、ゆけども／＼はてしなく、仰げば山頂雲を挺きて聳ゆたり。笹の葉の上よりまろひ落つる露を唇にうつして、乾ける咽うるほしつゝ、十歩すゝみては佇み、五歩上りては憩ふ。氣力も早や竭き果てゝ、今は如何なる山の陰岩の上なりとも伏して、今宵一夜を明さむかとおもふばかり、かゝる事と知りせば葉木に宿るべかりしものをと悔めども甲斐なし。汝男子の身を享けて、何ぞ心弱きこと手弱女の如きぞと、自ら叱して我を勵ますと雖、やがてまたたゆみ勝ちなる山路に、雨さへ降りうひて、五体今は霑はぬ限もなし。

